

『永平広録』と『正法眼蔵』とのほざまで

大 谷 哲 夫

はじめに

皆さんこんにちは。ただ今、普段は口の悪い永井政之学部長先生が大変丁寧な紹介をしてくれました。永井先生、私の研究室の隣なんです。私、十五年間、あの研究室留守にさせて頂きましたが、永井先生の声っていうのは、すごい大きな声なもんですからね、研究室に居るか居ないかはすぐ分かる。今日はえらく沈んだ物静かな永井先生でちょっとびっくりしたんですけど。私の原稿の一番初めの項目には「普段は口の悪い永井学部長から過分なご紹介を頂き」というふうになんと書いてあるんです。ということでごさいますして、本当に過分なご紹介を頂戴致しまして、誠に恐れ入りました。私がこういった講義と申しますか、講演に最初に出逢ったのはいつかと申しますと、これは皆さんご存じかもわかりませんが、津田左右吉という大家の方の講演だったんです。それは私の大学の二年の時だったんです。二年の時って申しま

すと、だいたい今から五十年ほど前のことです。何の時だったか思い出した方もおられると思うんですが、これは六〇年安保の年だったんです。それで、私も国会議事堂まで行きまして、放水を受けましてですね、もうグッチョグチョにさせられたんですね。何でこんなことさせられなきゃいけないんだ、というようなことを勝手に思いました。私の友達は過激なやつだったんです。仲良かったもんですから、逃げようって言う。何で俺が逃げなきゃいけないんだ、と思っただけでも、まあしょうがないと。それで、放水で蹴散らされてね、夜になっちゃたもんで、終電止まってたんです。私、家に帰りゃよかったんだけど、どういうわけだかその友達、西武線の石神井ですよ、石神井まで歩いて落ち延びた。ホントにやな感じでしたよ、あの時は。まさに落武者。トボトボトボトボと線路の間を歩いて行って、夜が明けてきて、腹は減るし、それで余計気が沈んで、どうしようかと。これからどうしようかと。俺は水掛けられるようなことをした覚

えもないし、というような、何か妙な虚無感に襲われたんですね。そういう時に津田左右吉先生の講演があるよ、ということを知らせてくれた人がいて、私、その時に聞きに行ったんですよ。そしたら二百人くらいの教場でビッシリだったんです。

私はその前の時にですね、ある先生から、湯用形の『漢魏両晋南北朝仏教史』上下二冊を頂戴したんです。お前だったらこれ読めるから読め、と言われたんです。それは、あの胡適さんが書き入れた本の影印本なんです。私も手に入れたかったんですが入らなくて、先生手に入れてくださり、お前にこれあげるから読めと。結局その先生は、学生運動なんかバカバカしいからやるな、ということを私に言ってくれたと思うんですけども、当時は過激で、何かそっちの方が面白いんですね。ワクワクするようなそんなバカげたことがあったんですよ。そっちの方へ行かなきゃいけないかなあというような、こう、振れてた時代だったんですね。私の大学二年の時は、ちょうど私が入学したのは五九年ですから、翌年が六〇年安保なんです。もう新宿駅なんてところはメッチャクチャでしたから。

そのような時代の中で、私は津田先生の講義を拝聴させていただいたんです。そのときの内容はよく分からなかったのですが、ただ、津田先生の最終講演っていうのは、学問に対

する自分の想いを述べられたと、私、今思っているんですけども。それで、何かこう学問に対する憧憬というものが強く湧き上がってきたんです、私の中で。それで、もうこんなバカバカしい運動は止めようと。決別してもんじゃないんだけれども、そういうようなことを決断したのが津田先生のあの講演だった。最後の講義と私は思ったんですけども、これは私の親友に調べてもらったらですね、津田先生のお弟子の流れの方なんですけれども、そうしましたら、あれは先生の最終の米寿の講演会だったんだということを教えてくれました。ああそうだったんだなあというふうに思っております。

私の学部の卒論というのは、儒・道・仏の三教の交渉史なんです。私はずっとそれをやりたいと思ってたんです。それで、釈道安って方がおられますけれども、この釈道安を中心に、三教交渉史の一環としてやっただけです。それが卒業論文で、マスター論文の方は、「安般守意経」を中心にしました。禅っていうものがなぜ入ってきて中国に定着したのかを研究テーマとしたのです。私をその道に引っ張ってくれたのがあの講演会だったんです。

ところで、私は、今、皆さんの前で高尚な講演をしようというのではありません。今日の演題は、『永平広録』と『正法眼蔵』となっておりますが、こんなでつかい題、ないですよ。「仏教とは何か」っていうのと同じですもんね。『永平

広録』と『正法眼蔵』ってあるけれども、この演題の注釈しますとですね、私が『永平広録』と、これまた後で説明致しますけれども、『正法眼蔵』のはざまで、言ってみれば道元禪師というその崇高な土壌の中で私がどれだけ彷徨ったかということをご報告させて頂く、というふうに思っているわけです。そして、今日、ご参集して下さった皆様は、仏教関係の方ばかりではないとお見受けしますので、私の原稿を離れて、できうる限り日常的会話の言葉で、少しでも分かる言葉でお話しさせていただこうと思います。

一、『正法眼蔵』へ

まず、私が『正法眼蔵』の参究に取り組んだ最初の因縁を申し上げますと、これは昭和四〇年です。学部卒業し、マスターを出て昭和四〇年、一九六五年のことです。永平寺に安居した時から始まります。まず、手甲脚絆に身を包んで山門に到着して、木板を三回叩きます。そして三拝して安下処で教えられたとおりに、「ごかいさんはいとうならびにめんかたよろしゅうといえ」と言ったんですよ。私の後ろにいた坊さんが、私を突っついて、「『と言え』とは何かーっ」って怒鳴ったんです。ここには安居のことが分からない方々が多いので書きますと、「御開山拝登並びに免掛搭よろしゅう」と言え」となります。「と言え」まで言っちゃった。そしたら、

『永平広録』と『正法眼蔵』とののはざま（大谷）

「『と言え』とは何かーっ」と怒鳴られたのです。これですね、道元禪師の開かれた御山で安居して、安居っていうのは修行することですよ。「安居してそこで仏道修行することをお願い申し上げます」ということで、今初めて聞いた人には恐らくわからない言葉だと思っんですよ。

そういうようなことをですね、私は経験させてもらいました。これはありがたいことですよ。今までまったく経験できないことを真つ正面に取り組んで経験させてもらったんです、私は。だからこれはホントいいことだったと思う。ただ、これにはですね、辛抱があるんですよ。三ヶ月辛抱すればこれは身につくんですよ。進退作法すべて身につけていく。これはいんですよ。進退作法、左足から入って右足から出るとかですね、合掌はこう、坐禅はこうするとか、それはいいんですよ、身につく。本当にわからなかったのは、御開山様の、日本曹洞宗の根本聖典である『正法眼蔵』なんです。私はずっと教場に立っておりますけれども、新人生にまず試験をします、入ってきた一年生にですね。「しょうほうげんぞう」と読める人は数少ないんですよ。「しょうほうげんぞう」「しょうほうめくら」ですよ。これほどに知らないんですよ。これ、どうすればいいんですか。

これからが難しいんですが、『正法眼蔵』は読めば分かると思っていた。ところが、私は分からなかった。ただ、本山

の中でですね、いい言葉があるんですよ。「そんなものは肌から染み込む。皮膚から染み込む」って言われたんです。だってわからないから聞きに行っただけどね、わかんなくていいんだ、そういうものは肌から染み込むって言われて、これはいい言葉だなあと思って、私は授業中に随分使わせてもらったんです。「私の授業は面白くないかも知らんけれども、この駒澤というキャンパスの中にいて、私の授業に出てると駒澤が肌から染み込むんだぞ、だから欠席するな」って私は随分言った。恐らくここに私の授業受けた人は、それ何遍も聴いていると思うんですよ。それで染み込んだかどうかわからないけれども、駒澤というこの良さはですね、みんなが持っているはずなんです。仏教学部の授業だけじゃないですよ。皆さんの駒澤大学の先生方の授業聞いて、その雰囲気みんなが習っていく、ということだと思っただすよ。それでですね、私もホント安易なことなんですけれども、本山にいてわかんないからですね、とにかく駒大にいきやわかるだろ、と。そして、駒澤に入れて頂いたんですよ。昭和四一年ですね。その時に、『眼蔵』の大家と言われた榎林皓堂先生がおられました。それで榎林先生のところへ、授業以外にも、私、法類ですから何遍も行きました。それから、もう一人、五十代でしたかねえ、横井覚道って先生がおられました。お二方の先生には法類ってこともありましたが、

随分お世話になりました。そして、大変失礼ですけども、今ここにおられる田中良昭先生にはですね、私、ドクター入った時に、今でも覚えておりますよ、印仏学会が京都であったとき、京都駅で一緒になって、「一緒に勉強しよう」って言われたんですけども、大変申し訳ないけれどもお断りしたんです、私。っていうことはですね、そっちの方へ行っちゃいそうだったんですよ、私。何のために駒澤に入ったのか、駒澤に入ったのは『正法眼蔵』やりたかった。『正法眼蔵』以外になかったんですよ、私にとっては。だから、今ここで謝らせて頂きますけれども、田中先生、ご無礼致しました。

そのようなことで、横井先生に、私こう言ったことがあるんですよ。「先生、『正法眼蔵』って難しいですね」って、私申し上げた。私は期待してたんですよ。「『正法眼蔵』って難しいよな、一緒に勉強しようか」と言ってくれると思ったら、何と言ったと思いますか。「えつ、あんなに懇切丁寧にお書きになられているのに何がわからないのですか」って言われたんですよ。私はこれには参りましたね、あつ、『正法眼蔵』がわかる人がいるんだ、これはすごいことだなと思って、私は、とにかく『眼蔵』『眼蔵』と思っていきましたから、『眼蔵』だけだったんです。あの当時、『正法眼蔵』の岩波版なんです。あれ私、三冊持ってますよ。ポロポロなんです。もう。だからといって全部覚えているわけでもないんですけ

れども。そしたら、「君ね、それは読んでるだけだよ。拝読しなればね」と言われたんです。その通りなんですよ。読みやあわかるってもんじゃないんですよ。拝読しなきゃならないですよ、皆さん。これが違うんだと、つくづく私、感じました。

二、宗学への立ち位置

それで、私は大学院から曹洞宗宗学研究所に在籍の期間で、すね、『正法眼蔵』漬けにさせてもらいました。『正法眼蔵』の内容を論文にできない。道元禪師こうおっしゃってるって書いて何になるのか、と思いついていた。だから私は内容についての論文は書いてません。周辺しかやってないんです。だけでもすね、わずかながらですけれども段々とわかってくるようになる、不思議とその道元禪師の正伝の仏法と称するものが知識として一人歩きしちゃうんです。仏法が知識としてのみ一人歩きしていくとすね、私は特に、その時は特にハイデッガーに凝って、これは大学時代からずっとやってたものですから、特にその時間と存在論というものと比較しちゃうんですね。これがそもそもその間違いだった。優越感を味わうんですよ。欧米の哲学を持ってきて理解しようと思うと、ある程度言葉の遊びでできる気がするんですね。でも、それでいいのか、という感じは常につきまといっていました。

『永平広録』と『正法眼蔵』とのほごまで（大谷）

禪師の仏法を知識のみで捉えたためでありましようけれども、その私の僅かな知識の範疇ではすね、現代という時代を背景とした宗義、曹洞宗の宗義ですよ、それから教団のありよう、僧侶としての存在、自分自身の中にある絶対でなければならぬものへの、正伝といわれる法への猜疑心というものが吹き出てくるんですよ、不思議と。止めどもなく吹き出してきた。どうするか。どうしたらよいのか、と。そのやり場所のなさに辟易として、それに反比例するように正伝の仏法と称するものへの信仰心が希薄になってくるんですよ。確たる学問として捉えられる力量がなかったものですからそういうふうになっていったんだと、今は思います。

それと、当時、『眼蔵』と並行的にすね、江戸時代のいわゆる伝統宗学、宗統復古運動を中心にして勃興し、あるいはそれ以後の宗学というもの、江戸宗学も参学していました。これは幕末に近くなると、仏教に身を置いた人たちが儒教に鞍替えしていきます。そして儒教や国学的な立場をもって仏教を徹底的に批判するんですよ。これはすね、面白いんですよ。他学を基にして仏教を批判するんですから。これは実に面白い。仏教に身を置いた人たちが儒教に鞍替えして儒教の側から仏教を批判しているものを読むと、新鮮に胸を打つものがある。儒者側の立場に心のどこかで快哉を叫んでるんですよ、もつとやれ、もつとやれ。だから非常に読

みやすかったですね、私にとつては。そうしているうちにです。ね、だんだんまた不安になってくるんですよ。果たしてこれでいいのか。宗学研究という、いやしくも宗乗という正伝の仏法を、信仰の中心としたその教義をですね、学問として捉えるという自分の立場、酒井得元先生は「仏教に立場はねえ」とよくおっしゃってましたけれども、見方の違いというものはやっぱりあるんですね、そういうものがあるんだと思いますよ。そうしたものが次から次へと葛藤として出てくる。どうしようかなって。それから、『正法眼蔵』の持つ質量と現代的な分別的知識だけではどうしようもないものがある。

三、道元禪師の「上堂」への思い

特に私にとって不思議だったのは、『正法眼蔵』のこと申し上げますと、道元禪師が興聖寺を弟子に譲られて入越された。あの厳寒の地の二年間です。ね、『正法眼蔵』の大部分を書き上げられ示衆されておられる。一日に二回示衆してるなんてところもある。これ何だろう。『正法眼蔵』というのは、道元禪師が「弁道話」を著した寛喜三年、一一三二年、道元禪師は一二〇〇年に生まれますから、数えて三十二歳ですよ。それから入越する直前の寛元元年、一二四三年、四十四歳、そこまで十三年の間に四十六卷『正法眼蔵』を書い

てるんですよ。そして入越後間もない寛元元年閏七月、これは禪師峰（やましぶ）という所で『正法眼蔵』「三界唯心」の巻を書いて示衆され、そして吉峰寺に移ってから精力的に『正法眼蔵』をお書きになられ、実に二年間で三十数巻を書いてしまってますよ。皆さんは『正法眼蔵』見て、道元禪師即『正法眼蔵』だと思っ。それは当然なんです。『正法眼蔵』なんですけれども、『正法眼蔵』は生涯にわたって書いたものではないんですよ。ずーっと書かれたように錯覚している方々もおられるかもしれませんけれども、そんなに書いてないんですよ。入越して二年間でほぼ完成するんです。それは十二巻本とかいろんなこと問題あるかもしれませんが。でも、二年間の間にほぼ『正法眼蔵』書き、示衆し終わるんですよ。なぜですかこれ。私は不思議でしようがなかった。これは恐らくですね、入越と同時に大仏寺を建立し始めているんですよ。大仏寺っていうのは、それから一年後に永平寺と改称されます。ですから、恐らくですね、新しい寺院が完成したならば、そこから本師天童如浄、自分のお師匠さんがなされていた、後でちよつと説明しますけれども、禪宗の正式な説法である「上堂」をなさりたかった。正確に如法になさりたかったのではないかと私は思っています。

で、ある人はですね、道元禪師の思索の特徴、だいたい思索の特徴なんて言葉を使うのもおかしいんだけど、四十

歳で現れ始めて四十四歳で絶頂に達する、そして思索がようやく変化し始めるという表現を使うんですよ。どうしてこういう言葉を使うのか私にはわからない。それによりまずと、思索が絶頂に達した結果の産物、それが『正法眼蔵』であると言っているのです。そんなことあるんですかね。私には、思索の展開つてことはあるかもしれない。しかし、だけでも変化するなんてことはあり得ない。であるならば如浄禪師膝下で懸命に坐禅をして、「一大事了畢をした」、これはどう理解する。仏法の究極を悟りとして捉えずに、そうではなくして単なる思想として捉えているからそういう表現になる、と、私はそのように思う。

四、『永平広録』へ

同時に、道元禪師の仏法というのは、普通『正法眼蔵』によつてのみ説かれてるように思われてる。しかしながら、中国禪者の存在というのは、その存在を確実ならしめている語録の参究によつてほぼなされるといふ事実がある。なぜ道元禪師には語録があるのに、『永平広録』十巻というものがあるのに、これを問題にしないのかということが、私にとつては大問題でした。

そこで私は『永平広録』の拝読を始めました。それは最初から暗中模索でした。全くわからない。

『永平広録』と『正法眼蔵』とのほごまで（大谷）

今でこそ、『永平広録』には、御草案本系統と流布本系統の二種類の系統のものの存在が知られ、前者に属するのは、永平寺の秘蔵本（十巻・門鶴本）とも称されるが『祖山本』と簡称する）・宇治の興聖寺の蔵本（十巻・以下『興聖本』と簡称）・日光輪王寺の天海蔵本（十巻・以下『輪王寺本』と簡称）・駒大図書館蔵本（巻一・巻二の二巻のみ・以下『心月寺本』と簡称）の四種類の筆写本であり、後者に属するのは、江戸時代に、卍山道白（一六三六〜一七一五）師が校訂出版した『永平広録』（以下『卍山本』と簡称）一種類以外には存在しないことが知られています。それらは厳密には、『祖山本』とそれを基にしたもの（『輪王寺本』と、『祖山本』と同系列の筆写異本二種類と、それとはまた別系統とも考えられない版本の一種類とが存在することなのですが、そうしたことは私の『祖山本 永平広録考注集成』上下二巻に判然と記しておきました。

しかし、当時『永平広録』の参考書というのは『正法眼蔵』に比べて全くないと言つていいに等しかったのです。私の座右に置かれたのは、原本としての和本の『卍山本』。『卍山本』が一番流行つてたんですね。それと伊藤俊光師の、これはもう苦労されたと思うんですが、『永平広録註解全書』だけだったんです。ところが、この伊藤俊光師のものは『卍山本』が中心であつて、『祖山本』が従なんです。原本と

従本とが前後している。第一、皆さん、道元禪師の「空手還郷、眼横鼻直」、「空手還郷」って言葉はよく知られていますが、これは『祖山本』の一番初めの言句じゃないんですよ。これは、『祖山本』は「依草の家風、附木の心」というものなんです。ですから、私は、これは一体何なんだろうと。つまり、原本が定まっていなかったのです。段々わかってくるんですけれども、要するに、私のこの『永平広録』の拝読作業っていうのは、あの当時、パソコンがなかったものですから、今でも手書きの原稿になって残ってますけれども、四百字詰め原稿用紙でものすごい枚数になっていますが、これは、あるところに出したら二年間放つとかれた。これだけは癪に障ってしょうがないんだけれども、どういうわけであるか、あらゆるところに鉛筆でチェックが入っているんですね。誰か何のためだか見てるんですね。そのため出版が二年遅れた。それはともかくとして、この作業を進めていく間に、『祖山本永平広録』と『祖山本永平広録』二つを作ったんですね。そして、これまで『正法眼蔵』のみに頼っていたその自分の中の葛藤の幾つかがとけていったのです。粗末なもんですけれど、大げさに言いますと、自分の自内証、この自内証の世界がいくらか自分でも何となく見えてくるような気がしたんですね。

五、自内証と言語表現の限界

例えばですね、これは『大般涅槃經』にあるんですけれども、道元禪師の語感というものの一端を申し上げれば、「一切衆生悉有仏性」、この言葉を捉えましてね、これは普通我々「一切衆生、悉有仏性」と読んでる。これは何でもないことで、一切の衆生は悉く仏性を有する、ということ、日本の仏教の大部分はずっとそのように理解してきたわけです。道元禪師は、そうじゃないんですね。「一切衆生悉有仏性」というこの言葉について、一般的には「一切の衆生は悉く仏性有り」というふうに読んでた。全ての人に仏性が宿つてると。その平凡な解釈、平凡って言ったからおかしいけれど、そういう解釈をしてきた。しかし、道元禪師は、「一切は衆生にして、悉有なり、仏性なり」と読んでおられる。そうすると、仏性を持つとされるその範囲が、ありとあらゆるものに広がるんですね、確かに。ところが、江戸時代の臨済宗の無著道忠って人はこう言ったんですよ。「永平、古語を引きて句説を誤る」と。要するに、そういうふうに読んだら正しい仏法は伝わらないじゃないか、と。しかし、そうした見解こそが旧態然とした解釈に滞って仏法の何たるかを見誤っているのです。道元禪師は、句説を誤ったりしていない、誤読なんかしていないんですよ。道元禪師の漢文読解力っていうの

は、幼少の頃から、詩経の集註まで読んでいるんですから、四書の類は八歳でほとんど暗記してしまっただけですから、それほど天才的な頭脳を持っている。それで入宋する。中国へ留学して生きた漢文、つまり中国語を学ぶわけですから、さらに磨きがかかるんですよ。これは『祖山本』の中によく出てくるんですが、「還要委悉麼（還要委悉せんとなすや）」という言葉がありますけれども、これ中国語で横に「ワンイヤオイシツマ」っていうふうには仮名が振ってあるんですよ。ですから、道元禪師が中国語がわからんなんてこと、絶対にあり得ない。「身心」と「心塵」を間違はずがないのです。ところが、近年までは道元禪師の漢文の読み方が独特なところがあるので、道元禪師は中国語に堪能ではなかったなどという俗説があつたこともあるんですね。

道元禪師は、その正伝の仏法を「弁道話」において解説し、「現成公案」へと展開されていきます。そして、後に九十五巻に集約される『正法眼蔵』の各巻においては、道元禪師の仏法が、証上の修、簡単に言えば、証りの上での修行を中心に展開される。今までの仏道修行っていうのは、坐禅を何のためにするんだ、悟りを得るためだ。だから、段々と坐禅して坐禅して坐禅して悟りに行くんだ。じゃあ、その坐禅っていうのはどうなんだ、向こう岸に着いたら坐禅はいらんないじゃないか、船で渡って向こう岸に行くその手段である、つ

ていうふうには考えていた。それを道元禪師は明確に、正伝の坐禅は、習禅、つまり悟りを得るための手段としての坐禅ではない、修証一等と明確に示された。これは道元禪師の独創であるという人がいる。そんなはずはない。独創であるわけがないんですね。これ、後でちよつと話しますけれども、道元禪師は決してですね、奇を衒つたり、独創的なことを言っているんじゃないんですね。つまり、道元禪師は正伝の仏法っていうものを釈尊以来の仏法、インド二十八代、中国二十三代にわたるこの仏法を踏み外すことなく我々に伝えて下さっている。ですから、宋朝禅からみると一大飛躍をしているような道元禪師の仏法というのは、当然のようにその文章表現というのは、従来のものとはいささか異なつた訓み方、書き方をされているところがある。つまり、当時の中国語、漢文っていうのは膨大な表意文字から構成される言語で、そのために、感覚的な意味合いを伝えるには適した言葉ではあるのですが、論理的な、極めて論理的な思考を發展させるには適した言語ではないかもしれない。だから、中国人が発達させたのは直感的飛躍的な思维形式であり、禅的表现もまたそうした中国人の思维形式の所産であり、その範疇にあるとも言えるのです。ですから道元禪師は漢文表現に、日本語の論理性を加味して、独特な道元的言語宇宙を創出したと言えます。それは道元禪師が、文筆詩歌を詮無きこと、最高

のものではない、あれだけの文章をお書きになりながらそういう決意をするんです。仏法の表現として言語の空しさを確実に実感し、初めて仏法を表現する言句の力を最高度に発揮する、緊密で凝縮した文章表現、それが道元禅師の言語であると言えるのです。禅語に「説似一物即不中」という言葉があります。あることを、文章、あるいは言葉で表現したらたちまちの外れになるといことなんです。例えば、下世話な話をしますよ。あなたのことを好きです。どこが好きなんですか、どうして好きなんですか、表現しきれないんですよ。それが言葉なんです。欧米では言葉の存在っていうのは全てであると、「言葉は存在の家」であるといったのはハイデッガーですけど、まさにそうだと思うけれども、東洋的言語宇宙という、教外別伝・不立文字の世界観からすると、ちょっと違うと思います。そういったことはですね、『永平広録』の漢文と、それから『正法眼蔵』に見られる漢文と、読み方と、それを比較した時に明確になつてくるんですよ。

これはもうかなり前のことでありますけれども、『永平広録』を現代語訳にして連載してもらえないかということがありました。その時に一番困ったのが、どういうことかといいますと、言語表現なんです。どういう表現にするか。これはもう、私はそれで悪戦苦闘したといつてもいいんですけれども、段々とこの『永平広録』と『正法眼蔵』を比較、比較

じゃない、全部を混合して読み比べていきますと、見えてくるんですよ。『正法眼蔵』だけじゃあ見えないところがあるんです。例えば、『永平広録』では当時の永平寺僧団の姿が見えてくる。『正法眼蔵』だけでは見えないところが見えてくるんですよ。例えば、道元禅師が初めに上堂されたのは、「依草の家風、附木の心、道場の最好は叢林なるべし。床一撃、鼓三下。伝説す、如来微妙の音」。これはどういうことを言っているのかつていうと、草々にも真実の仏を見る正伝の仏法の家風、また木々にも真実の仏心を知る、仏の心を知る、そのようなことを体認しうる修行道場としてもつともいいのは、わがこの叢林である、これは深草の興聖寺のことで、叢林では禅床を打つ音、太鼓の音、そのような音声の中にさえも釈尊の微妙な真実のみ教えが説かれてるんだというんです。ただこれは、私が今現代語訳をしたからおわかりでしょうけれども、これを直接読んだらわからないんです。『正法眼蔵』を下地にしていないとわからないところが多いんです。だから私は何遍も言っていますけれども、道元禅師の仏法を理解する、表面的にでもいいから理解するためには、『眼蔵』が大事ですよ。それから、『随聞記』もいいと思うんですけれども、それよりも今ここにおられる池田魯參先生、私の大学院の時の親友ですが、先生がおやりになった『宝慶記』。これが道元仏法へ入る一番の近道だと私は思っています。

す。あんな懇切丁寧に記録したものはないですよ。

六、道元禪師の「上堂」のすがた

そういうようなことですけれども、我が国で最初に上堂されたのが道元禪師。「日本人、上堂の名を聞く最初は永平の伝うるなり」と示されるように、道元禪師の上堂が日本における嚆矢です。それ故にか、禪師の上堂への情熱は格別なものがあります。『永平広録』七巻まではこの上堂語を全部収録してあるんです。五百三十一編ですね。

寛元二年（一二四四）六月七日に吉峰寺に別れを告げられ、同年七月一八日に大仏寺（後の永平寺）に移られてから、建長五年（一二五三）のご示寂までの大仏寺・永平寺時代の九年間には、『正法眼蔵』の撰述は僅かに七巻に過ぎません。しかし、上堂は、興聖寺時代には百二十六回（『祖山本』巻一「興聖寺語録」・『正山本』は百二十三回）に過ぎなかったものが、大仏寺・永平寺での上堂数は、実に四百五回（『祖山本』巻二・巻七）にも及びます。

その事實は、『正法眼蔵』の示衆が、寛元三年（一二四五）を境としてほとんど行われなくなったことと、まさに期を一にするのです。ちなみに、道元禪師の後半生、特に仁治二年（一二四一）からご示寂の前年に至る十一年間にわたる上堂回数には実に五百一回にも及ぶのです。ですから、道元禪

『永平広録』と『正法眼蔵』とのほがまで（大谷）

師の後半生のまさに円熟された演法説示は『永平広録』に収録されている上堂にこそあることが歴然とするのです。したがって、道元禪師の正伝の仏法の宗旨の参学には、『正法眼蔵』の参究はもちろんのこと、『永平広録』を判然と認識することを怠るならば、決して正鵠を射たものではないことを、禪師を宗祖と仰ぐ我々門下は肝に銘じておく必要があるのです。

我が国でこの上堂が最初に行われたのは、嘉定二年、一二三六年、道元禪師三十七歳、陰暦一〇月一五日。一〇月一五日といつて皆さん思い出すことありませんか。わが大学の開校記念日は一〇月の一五日です。恐らく、わが先人たちはこのことを理解していて、一〇月の陰暦でありますけれども、一〇月一五日をわが大学の開校記念日と定めたはずですよ。これは私、ずっと以前に『学園通信』に書いておきましたけれども、そうなんです。これを言った後で道元禪師は、「さあどうだ、まさにこの時、そこを興聖の門下である、私の弟子である大衆諸君、それをどのように表現し得るか」と問いかける。そして良久して、良久っていうのはやや久しくして。これがですね、道元禪師の上堂にはずっとあるんですよ。良久するんです。その良久は、間髪入れずなのか、長い間黙っていたのかは解らない。だから昔は良久してというのは訳さない、というふうに言われてたんです。私は、

だから、持って帰ってもらうの、ちよつとこれはご迷惑だ
なつていうんで、引出物、後から送りますつて言つて、送つ
たんですよ。ところが、これが三浦岬なんですよ、三浦岬の
お寺さんから送つたもんだから、普段送ってくるのはマグロ
以外無いんですよ。だから、マグロのブロックが送られてき
たんだらうと、三崎から来たんだから、つていうんで、慌て
て冷凍庫に入れちゃつたんですよ。それで半年経つて取り出
したら、何とこれが『永平広録』だつたつていう。実に罰當
たりなことですね。これウソじゃないんですよ皆さん。

それはともかくとして、先ほど言いましたけれども、『永
平広録』というものが疎外されてたつていうのは、私はわか
るような気がしたんですよ、ホントに。『正法眼蔵』は仮名
で、日本語で書かれているから分かりやすいという大いなる
誤解が存在する。それで、臨済の人たちは、かえつて『正法
眼蔵』を読むよりも『永平広録』を読んだ方がわかるつて言
うんですよ。それはともかく、道元禪師のこの上堂における
仏法の実践というのは、その師匠である天童如浄古仏の膝下
で実体験された、ご自身が感動され、究められたその様式を
そのまま日本へ持つてきた。だから、その上堂で言われたこ
とを理解するためには、正伝の仏法の本質を知らなければ解
らないわけですよ。今でもそうですよ、晋山式の上堂やつて
ます。あれ一般の人でわかる人いますかね。古代語でやつて

るんですよ。だから儀式としてはいいんです。素晴らしいの
です。私はこれを否定しません。でもその解説にしたつてで
すね、その解説の仕様も私はあると思つてる。よほどこれは
考えて現代という場をふまえてやつていなくてはならない。
歌舞伎を見るんじゃない。あれは、仏道修行の一環なんで
す。だから、それをきちんと而今に現成するようにやつてい
かなくてはいけないなというふうに思います。

七、道元禪師の仏法の一端

ところで世の中は、今、まさに心の時代。出版社を含めて
一般の人々からは、なぜか漢文で書かれた仏法書、これに現
代語訳が求められる。なぜか。和訳し、現代語訳すれば意味
がわかるという錯覚がある。ところがそうはいかない。現代
語に訳したからといって、わからないのはわからない。わか
らないということはですね、私はこれの、『永平広録』とこ
の『正法眼蔵』の狭間の中でわからないことがある程度わ
かつたということ、どういうことかつていいますと、曹洞
禅ではよく言われるんですが、一器の器から、一器の水を、
その弟子の一器の器に移すということを言います。仏法を。
ところが、私はザルだつたんですよ。だからわからないんで
すよ。漏れちゃうんですよ。だからその正伝の仏法を受け止
める器じゃないのに受け止めようとするからわからない。ザ

ルだからどんどん漏れちゃう。何にも残らないですよ。一器の水を一器に移すというのは、嗣法の時よく使うんですが、仏法を嗣続する、あるいは嗣法、その時の言葉なんです。だからここにいるお坊さん方、よほど注意しないと、いけません。本当に、仏法を嗣続するっていうのは、増減無く、釈尊が示されたものを二十八代、東土二十三代、そして、まともに受け取った天童如浄古仏の仏法を道元禪師は全て受け止めてきたんですよ。それを我々に示しておられる。私がザルだったから、現代的分別知というザルを持つてすくつていたからこれは伝わらないんですよ。そこを本当に私は気づかさずして頂けたということですね。

特に道元禪師の招来された正伝の仏法というのは、智慧を媒介とする信ですね、それに基づく行においてその真実相を、あの皆さんね、「相」つてありますね、これ何だと思えますか。姿ですよ姿、だから仏教の書物で相つて出てきたら姿と思つたらいいんです。たとえば人相とか、手相つていうじゃないですか、その姿ですよ。その真実相ですすね、顕している。只管打坐によつてのみ真実の理解に達するといつても過言ではないんです。

また、道元禪師の行実の実際というのは、禪師が鎌倉行化に赴きます。これは映画を見てくださった方はよくわかると思うんですが、道元禪師が鎌倉に行つて帰つてきた時に、す

ぐ上堂されるんですよ、翌日に。半年ピッタリ行つて帰つてくるんですよ。そして翌日上堂してその時言つたのは、「お前たちが私のことを非難しているのはよくわかつている。私たちを蔑ろにして鎌倉へ行つて何をしてきたんだ、ということもよくわかつている。私は仏教の因果の道理を説いてきただけだ、時頼に」と。そう上堂されるんですよ。どうしてそういうことを言えるかというと、「私の仏法というのは明得である、説得である、信得である、更に行得である」からだということですよ。これは私は、鎌倉仏教者の新仏教の中で、自分の仏法をこれほどにですね、明確に表現した人はいないと思つてます。つまり、どういうことかつていうと、「明得」というのは、明らかに悟りを得た仏教だと言つているんです。それから「説得」だつて言つてるんですよ。十分に説き得ると言つてるんですよ。

ところが我々は、先輩たちから、私もずいぶん間違つて教えられたところがある。正師に非ず、ですよ、まさに道元禪師が言つておられる。自分も達磨さんの所へ行つた慧可のようには、自分もこの腕を切り落として、仏法を求めんなんてことは、簡単なことだと思つて。それぐらいの意気を持つて。だけでも、師がいないじゃないかつて言つておられる。正師、これを求めて道元禪師は彷徨うわけですから。それでですね、明得、説得、信得、行得の十分に説き得る仏法を

我々の先輩たちはこう言ったんです。「和尚さん、仏教教えて下さい」「よしわかかった、本堂行って坐つとれ」。これで済んだ時代は済んだんですよ。でも、今はそうはいかない。和尚さん、一緒に坐ればまだいいんですよ。坐つとれって言つて、黙つてる。でも、その時代はそれですね、本堂で真つ正直に坐っている人たちがいたんですよ。

私もそれでいいと思つていた。でも、やっぱり説得が必要なのです。「八九成を言いえたり」という。私、先ほど言つた「説似一物即不中」という、悟りというものを喋りだしたら、もう、これは的はずれでこつち行つちやてる。これはいいんですよ。でも、八九成は言いうる。全部十割求めたつてそんなことはできない、八九成が全てである。八九成を言えればいいということもあるんだけど、道元禪師ははつきり言つてるんですよ、説得だつて。言葉でできるじゃない。これ八九成かも知れない。でも、それで十分だ。そして、それをすね、疑いなく信ずる「信得」つてことなんですよ、皆さん。はつきり信ずるんですよ。皆さん信じているものありますか。こうやって失礼ながら顔見ててもはつきり信じているものを持つている人はいないような感じするな。どうですか。私の最初の教え子たちももう五十過ぎてるんですよ。大丈夫かな。私も私に、自分に問うてるんですよ。で、「信得」である。疑いなくしつかりとこれを掴んでるつていうん

『永平広録』と『正法眼蔵』とのほごまで（大谷）

ですよ。そして、更にそれを行じ得ると言つてるんですよ。「行得」なんですよ。

だから道元禪師の仏法は、私はすごいと思つてる。これだけ言い切つた人は私の知つている限りではないんですよ。だから私は、道元禪師の正伝の仏法の宗旨の参学には『正法眼蔵』と、さらにはつきりと『永平広録』の上堂語を理解していかなければ正鵠を射たものにはならないと言いつてきたのです。はつきり言いますと、『正法眼蔵』つていうのは参学者たちの信に基づく仏法の基本的な教科書ですよ。『永平広録』の上堂はその智に基づいたそれを透過した悟りの実践の場ですよ。信に基づく行への転化の場なんです。だから魂の救済の場なんです。道元禪師はこうやって払子を振ります。無というのは言葉で表したら無だけれども、何も無いつてことを擲下するんですよ、払子を。一円相を画く。この一円相を画いたそれさえ捨てるんですよ。これを払子を擲下す、というふうに表示しているんですよ。

だいぶ時間も迫つてきたので端折りますけれども、「いわゆる悟りは太だ容易に領覽せざるなり」悟りつてのは容易に掴めるもんじゃやない。「思慮分別のよく解するところにあらざ」考えたつてわかるもんじゃやない。「聡明利智の曉了するところにあらざ」頭がいいからといって悟りなんか得られるもんではない。

八、禪仏法の真髓

宗学の重要な要素ってというのは、現代では分別智、つまり、一九世紀以来のドイツを舞台として展開してきた、欧米思想の主流を形成した極めて強い論理的な周囲の範疇で、批判にこそある。たとえ宗祖であろうと逃さないのです。仏法批判、そういう土壌を生んできた。しかし、そのような、幕末の、仏者から儒者に鞍替えし、朱子学を背景とした批判の諸論の多くが、旧来の体勢に対して痛みを伴う刺激を与える反面、ともすると時代思潮に流された誤った見解の格好な温床にしかかなりえなかつたようなことになりかねないのです。そこには極めて個人的な知的な遊戯はある。面白い。しかしそれは、知的遊戯ですよ。その背景である教団にあつて発心し修行し、威儀即仏法として、只管打坐に励んでいる人々がいる。私、生意気なことをここで言っているけれども、こういうふうに喋っている瞬間でも永平寺、總持寺、僧堂では坐禅している人々がいるんですよ。その、そうした僧侶たちへの配慮がまったく欠けている。それは何か。信がないからですよ。そこには現代宗学といえども教団を背景としてなり立っている配慮、慈のかけらもない。知的遊びがあつても、絶対的信仰心に基づく精神の酔いがないんですよ。こんなことではダメなんです。宗学は、何と言つても現場と直結するものでな

ければ、真の意味がないという自覚がないからです。

なんて偉そうなこと言っているお前はどうか。お前はどうかっていうことは最後に言わせていただきます。ですから禪宗、菩提達磨大師、禪者たちは、禪的境涯が知的遊戯に墮するところがあるからこそ種々様々に工夫したんです。禪の真実が、禪の真実が師資相伝、弟子と師匠、そこに現成されている。だから、隨身という形が求められる。提唱をし、禅機と呼んで苛酷なまでの修行を求めた。ところが今、隨身という制度がなくなっている。勝手気まま。伝統も何もないんです、そこには。隨身つて言うのは、師匠に身を従えるんです。ただ今はね、お父さんですから師匠は。肉親相続になつているんですから。一器の水がだいぶ漏れてしまった。ここに一つの大きな問題があると言えはあ。

「夫れ、仏法を学習すること、最も難得なりとす。所以は何となれば、縦え発心の実有りといえども、落魔を知らず、発病を覚えず、道心破敗して修証退墮す。真に憐愍すべきものなり。近代の学者（仏教を学ぶ者）、聡明魔にみだされて悟道となす」。頭良く理解するからそれが悟りだろうと理解するけれども、それは、「名利病の発こりよつて効験となす」だけだ。少し得たと思つて、これでいいとする。これ、道元禪師の上堂の言葉です。また別の上堂でこういうふうと言っている。「学道は大だ容易ならず。所以に古聖先徳、善

知識の会下に参学し、ほぼ二、三十年を経て究弁す。雲巖・道吾四十年弁道し」四十年ですよ皆さん。このことだけで四十年、「船子和尚、薬山にあること三十年、ただ箇事を明得せり」。ここでも出てくる「明得」、明らかに悟りを得てくんですよ。つまり、禅仏教の台頭というのは、中国における移入仏教や翻訳仏教におけるその解釈や註解を中心とする学問仏教に飽きたらずに、中国人特有の儒教や土着の信仰を土台とする道教など、それを背景として現実主義に基づいた仏教として、単なる思想ではないんです。哲学でもないんです。れっきとした信仰による仏道として、台頭してきたものであるという事実が厳然としてあることを忘れてはならないのです。

禅仏教の一大特色というのは、打坐即悟りを中心として人と人とのこの関係を最も重んじた仏教であるということができる。そこに確たる信仰というものがある。だからその形式として師資の関係なんです。師匠と弟子なんです。だから皆さん、これからでもいいけれども邪師に逢ったらダメです。変な人に付いていったらダメです。人生取り返しつかないんですよ。道元禅師はよく言います。私もその一人なんですけれども、学解、単なる学解の解釈で終わらせてはならないと。行解相応でなければならぬ。私は道元禅師の仏法をそう思っています。そうでなければ道元禅師の最も嫌う「眉鬚墮落」ということになります。これは仏罰を被ることを言

『永平広録』と『正法眼蔵』とのほごまで（大谷）

うんですけれども、眉毛が抜け落ち、鬚も無くなっちゃうと。

九、これまで、そして、これから

大部時間も経ってきておりますんで、司会者の方がこちらの方を見て睨んでおりまして、止める止めると言ってますから、ここでだいたい終わらせて頂きますけれども、取り留めのないことを私はお話しさせて頂きました。私の話したこと、これは『仏遺教経』にこうあるんです。「我は良医の病を知りて薬を説くが如し」私は、これは大変失礼なんですけれども、立派なお医者さんがこの病は何とかであるとかわかってる。そして、この病はこの薬が効くよと、いうふうに説くんだけれども、それを飲むか飲まないかはその人によるんだ、ということなんです。これは私が言うとか大変ずるい言い方かも知れませんが、こういう言葉を拝借してそのように言わせて頂きたい。それから、言いたいことはもう、うんとあるんですが。この間テレビを見てたら葛飾北斎が出ておりました。葛飾北斎の昔の富嶽百景の序文にですね、こう書いてあるんですよ。「私は六歳の時からものの形を写すのが好きであった。図画を説いて世に出てきた。しかし、七十歳より以前に描いたものは、取るに足らないものばかりである。七十三歳にして鳥や鳥獣、虫、魚などの骨格や草木の実態を知り得た」七十三歳にしてですよ、皆さん。「八十になれば、

ますます画業が進み、九十歳ではその奥義を究め、百歳ではまさに神業の域に達しているであろうか」と書いてある。八十九歳でもすごい画を描いて翌年亡くなるんですね、北斎。そういう人もいる。

それで、私は先ほど、お前はどうかだということの後で言うとお申しましたけれども、四十有余年、はつきり申し上げて、その正伝の仏法は、その機峰まさに魏々然と聳える万仞のごとく測り難きものであり、はたまた万頃の波の涯際、まったく見極め難き観を懐かしめ、未だ参学しても参学しても、道元禅師の奥義に達せず。私も宗門の僧侶でもあります。学人の端くれでもあります。それで、その見解も非常に貧しいものでもあるけれども、それを承知の上で、宗祖の宗風を汚すものではないかという恐れを抱きながらも、敢えて一般の人々にも工夫を施して、宗祖道元禅師の宗風を理解する仏縁になればと思つて、現代語訳や小説や映画など、様々なことをやってきました。そして今回、私の報恩行でもないんですけれども、「日本人の言葉」というシリーズの中で、道元禅師を、私、担当せざるをえなくなつたんで書かせていただきました。

それで、お前どうだつていうことは、私は昔から、この言葉が好きなんですよ。これ皆さんも良く覚えておいてもらいたいんですが、「末世の比丘、形沙門に似て心に慚愧無し」

形は坊さんの格好してる。だけど心に恥じるところがない。「身に法衣を着けて（袈裟を着けて）、思い俗塵に染む」俗っぽいことばかりしてる。そして「口に經典を誦え、心に貪欲を思い、昼は名利に耽り、夜は愛著に酔う。外に持戒を表して、内に密犯を成す。常に世路を営んで、長く出離を忘す」。これ皆さんいつ頃の人の言葉だと思えますか。道元禅師の直後に出た臨済系の中峰明本という人です。まさに現代にもあてはまりませんか。いつの時代でも、世の中を判然と見ている人がいるのです。そういう人たちがいるんですよ。それで、皆さん。本当に私は、最後に心から御礼を申し上げます。今申し上げてきたとおり、私は道元禅師を参究させていただきましたけれども、その道元禅師参究のご機縁をいただいで、そして、この駒澤大学に奉職させていただき、仏教学部に籍を置きながら、何の因果か、学生部長・教務部長・副学長・学長・総長と務めさせていただきました。その折々にご縁をいただいた方々、そして、学生たちと心底から接することができたことは、私にとって無上の幸せでありました。つくづくと感謝を申し上げます。ありがとうございます。

もう、これ以上は言葉になりません。

ご静聴を心から感謝申し上げます。

二〇一〇年二月一九日 於駒澤大学二二〇周年アカデミーホール